

手稿本によるオリジナル版 *Sanctuary* の研究 (X)

菊池 昭

24. 「第XXIV章」について (承前)

ところで、この No.131 にみられる紙質の違いということに関連して mss. 全体を調べてみると、次のようなことが判明する。すなわち、

- (1) 紙質の違う原稿紙は、他の大多数のものより心もち厚手で、透しの文字がはっきりしている。
- (2) そういう質の用紙は、マニュスクリプト総数 138 枚のうちに四枚あり、それらの中の二枚に *Sanctuary* のタイトルと更に Chapter One の標示を一度書き込んだ跡がある。

以上のことから、*Sanctuary* は最初この用紙を使って書き出されたと考えてみて、マニュスクリプト左肩隅の抹消されているページ・ナンバーを調べながら並べてみると、この作品はその最もはじめのかたちにおいて次ページの表に示すような構想のもとに書かれて行ったのではないかと推測される。

表の欄外、注 (b) に記したように、MS. 18 と 19 についてはやや不明確な点もあるが、当初それらは MS. 42 に続いていたものと考えてほぼ間違いないように思う。

しかし MS. 131 で、1.16 と二つの 1 の間に小数点のような点をつけて抹消されている 116 の番号については、もう少し検討を要するだろう。このページには 1.16 以外に抹消されたナンバーはない。そしてこれに先行するマニュスクリプト中の二枚に 114, 115 が一度記入されて消されているから、116 は当初からその位置におかれるべく書かれたようにみえる。

だが仔細に点検すると、このページにはいくつかの奇妙な点のあることに気

Canceled MS. Nos.	Canceled Chap. Nos.	Contents	Fixed MS. Nos.	Fixed Chap. Nos.	Published Book
1	Chapter Two ^(a) Sanctuary Chapter One	大学構内での Temple の派手な姿	39	VII	第4章 p. 28, ll. 1-16
9		町の青年たちの会話を通して知られる Temple の暮らしぶり, および彼女と Gowan との関係	40	VII	第4章 p. 28, l. 17 - p. 31, l. 24
10	Chapter Two	町の青年たちと酒を飲む Gowan	41	VII	第4章 p. 31, l. 24 - p. 34, l. 10
11		Gowan は泥酔し, Temple の乗った汽車に乗り遅れて Temple に罵られる。Temple は「Oxford へ連れもどしてくれ」と要求する	42	VII	第4章 p. 34, l. 11 - p. 36, l. 26
15 ^(b)	(左側下部のマージンに) Chapter Two	酒の密造場所では出会った Goodwin, その女, Tommy, 盲目の老人についての Horace の印象と, Tommy の語る Popeye の小心さと残酷さ。(Chapter Two の標示と並んで, 盲目の老人に出くわした Temple のおどろきとおびえの唐突な叙述がある。ただし, それは全部横線で消されている)	18	MSIII (TS. IV)	削除
16		Goodwin の過去と, 彼への愛に一切を賭けて生きる Ruby の描写	19	MSIII (TS. IV)	削除
1.16 ^(c)	Sanctuary Chapter One	法廷にあらわれた老人 (Temple の父) の描写	131	XXIV	第28章 p. 281, l. 6 - p. 283, l. 1

(a) はじめに Chapter Two を一度記し, それを消して Sanctuary Chapter One と書き変えている。

(b) 最終的に MS. の 18 と 19 になった原稿は, 両者共多くの抹消ページ・ナンバーを持つが, 15 および 16 がそれぞれの最初のページネーションであったと考えられ, かつ上記の canceled MS. No. 11 の原稿につづくものであると見受けられる。

(b) 116 の意味で, 二つの 1 の間にある点については本文中で説明。

づかされる。一つは、この MS. 131 の一枚前の原稿、MS. 130 (抹消された番号では 115) の最下段の文章が、MS. 131 に引きつがれて完結するかたちをとってはいるものの、それは明らかに、あとから無理に No.131 の余白を使って書き込んだということのわかる状態になっており、しかも使っているインクは 131 本体より色の薄いものである。次のようなかたちになっている。

1.16 131	no longer subject this denseless child to the agony of—" He ceased: the heads turned as one and watched a man come stalking steadily up the aisel toward the Bench. —Sanctuary— —Chapter One— —From beneath her small brimless black hat...
------------------------	---

更にこのページの最後の一行に Horace の名前が出てくるのだが、それは“Horce Benbow” とフル・ネームになっているのである。これ以前の原稿ではすべて“Horce”だけになっているのだし、この部分に照応する TS. (p. 345) でも R. (p. 283) でも“Horce”に直されているのだから、これはやはり、オリジナル版の主人公が“Horce Benbow”として、現在「131」という番号を付されているこの原稿において初めて登場したのだと考えても、必ずしも不自然ではないと思う。しかも、そうした考えに従って眺めなおせば、1.16 の中にある小さな点も理解の行くものになる。これはまさしく、一番目をあらわす「1」につけた句点だったのであり、しかも Faulkner はこの原稿をわきへ押しやっで別のかたちで (つまり、違った質の紙を使って) *Sanctuary* を書き進め、ちょうど 115 枚目を書き終えたときにこの取り除いておいた原稿を利用することにした—あるいは利用できるような筋の流れになったので、「1.」のうしろにただ「16」をつけてそれを利用したと考えることができる。(その後さらに推敲を重ねて、結局このページは最終的に「131」という番号のつく位置に落ちついたわけである。)

さて、それならば、この MS. 131 [1.16] ([]内はキャンセルされたページネーションを示す。以下同じ)の Chapter One と、MS. 39 [1]のそれとはどちらが先に書かれたものであろうか。

MS. 39 が、それに続く部分 (MS. 49 [9], 41 [10], 42 [11], 更には MS. 18 [15], 19 [16]) を残しているのに対し、MS. 131 はこれだけで終って後続するものを持たないということから、この段階では想がまだ安定していなかったため筋として十分に発展させられずに中断したと解釈するなら、MS. 131 が Faulkner の *Sanctuary* の最も始元的な書き出しであったと考えることもできる。

そしてもしそうであったとすれば、Faulkner は最初、事件が終結したまさにそこから出発して徹底的に過去へ逆戻りして行こうとしていたといえるだろう。だがそういう構成にすると、Horace は裁判という社会的な場面にまず登場することになり、従って彼の社会人、公人という私情をまじえることの少ない面がまず強調されることになるわけだから、Ruby, Narcissa をはじめとする Belle, Little Belle などの女たちとの、かなり情的なかわり合いを通して Horace の内面を表出して行く最終稿とは、大分趣きの異なったものになった、あるいは少なくとも、Horace の情にかかわる面に立ち入って行くのがいくぶん困難になったのではないかと思われる。そういう判断があって、Faulkner はこの稿をわきに取り除いたのではなかったらうか。

もちろん、MS. 39 [1] 以降のものが一番先に書かれたものかもしれないが、MS. 131 [1.16] について上記のように推理し、かつ MS. 39 以降に書かれたであろう筋を考えると、MS. 131 がやはり一番先のものだったと言っているように思う。

そこで、MS. 39 [1] 以降の筋についてだが、それは次のようなものであったかもしれない

MS. [1] と MS. [9] の間の七枚、および [11] (MS. 42) と [15] (MS. 18) の間の三枚の原稿がどのような内容であったかはもちろん知るよしもないが、いずれにせよこの稿では、まず Temple の記述ではじまり、Temple の中にあ

る墮落の種を詳細に述べて、事件はまさにこの墮落の種から発することを暗示する。次に一転して Horace を主人公にし ([15] では、最初 Horace が “I” で語るかたちで書かれ、あとから第三人称に改められた跡がある)、彼と Goodwin たちとの出会いについて述べられるのだが、それはあるいは、[11] と [15] の間にあった部分で述べられたかもしれない Temple と Goodwin, Popeye たちとの出会いの叙述に重ねあわせるようなもの — Temple の方の叙述をきっかけとし、それを Horace の方の記述で補足して行くようなかたちであったかもしれないと思われる。

[15] (MS. 18) では、Horace の見かけた盲目の老人のことが述べられるが、前掲の表の通り、このページの下の方で、Faulkner はめしいのこの老人に出くわした時の Temple の様子を描き、その横のマージンに Chapter Two と書いている。このことは (Temple の話と Chapter 標示のどちらも抹消されているが)、あるいは Temple の叙述と Horace の記述の相互補完という推測の一つの根拠になるかもしれない。

つまり、この時の Faulkner の構想は、Temple (あるいは、ほかの誰でもよいが) を中心とした客観描写と、それに何らかの意味で関係のある Horace の (情的色合いをもつ) 想念を交互に並べて記述して行くことであったかもしれないと思う。

しかし一方、Horace 中心の物語にしようとするなら以上に述べたような展開にするよりも、裁判所の傍聴席に坐わり、物語の発端から結末までのすべてをおのれ一身のうちに凝結させつつ、自分の努力が何もかも水泡に帰して行く様を呆然と眺めている Horace の姿から書き出そうというのは極く自然な発想であったかと思われる。

とはいうものの、Faulkner の主たる意図は Horace の対外的行動力の描写ではなく、彼の内的葛藤を軸としながら全体が動いて行くものにするということであったから、それをよりよく表わすためにはまず Horace を出すべきか、Temple を出すべきか、あるいは Horace を出すにしてもどのようなかたちにすべきか、そうした物語全体の展開にかかわる問題があり、それについての苦

心の軌跡が MS. 131 の Chapter One から MS. 39 の Chapter One, そして現在の MS., TS. の Chapter One への移行ということになったと考えてよいのではないだろうか。

ところで、オリジナル *Sanctuary* が頻繁に時間を逆転させる構成になっていることについては、すでに繰り返し問題にして来たところだが、Chapter One 標示のある上記二つの稿、MS. 131 と 39 もまた、そこから出発した物語は同じように過去遡及の構成をとることになったろうと予測され、特に MS. 131 のものなどは、三種の稿のうちでも最も徹底して過去へ戻って行くかたちになったはずである。

オリジナル版にみられるこうした執拗と言っていい過去遡及ないしフラッシュバック——別様にいうならば、「現在」の中への唐突な「過去」の闖入——は、人間の生とは過去が幾重にも積みかさなったものであるという作者の考えに基づくものであるかもしれない。とすればこの作品を書いた当時の Faulkner は意識的に、「人間はその過去の総和である」⁽¹⁾ の考え、というよりもむしろ、「人間はその不幸の総和である」⁽²⁾ という *The Sound and the Fury* につながる考えを打ち出し、それぞれの人物の「不幸」を浮かび上がらせたのだというようにも考えられる。そうした推論はいささか考えすぎだという批判も当然にあらうが、しかし実のところ、この作品に登場する人物たちは誰もかれも、読者をしてそうした思いへと誘い込む濃密な影を引きずって動きまわっていることもまた間違いないし、あるいはまた例えば、先行する章ですでに死んでしまっている人物が、後の章で再び生きて動いているのを見るとき、読者はそこに描かれるこの人物の行動をある深い感慨をもって眺め、「人生とはとりかえしのつかぬもの」という強い思いにとらわれることにもなるであらう。

さて、MS. 131 [1.16] の抹消された部分をもう一度眺めてみると、冒頭から

(1) *Faulkner in the University*, pp. 48, 84.

(2) *The Sound and the Fury* (New York: Random House, 1929), p. 129.

二行目の次の文言が目につく。

Upon her lap lay a platinum bag, …

ところがこの句の横のマージンには “black satin” の二語が書かれてあって、それを “her” と “lap” の間に挿入することになっている。これは R. では p. 277 に現れるものだが、この R. における文だけをみれば、“Upon her black satin lap” が文頭にあるのは、文の姿なり音調なりの問題としてだけ片づけられそうである。

実際、このことについては次のようなことが考えられるだろう。まず二つの文を挙げてみたい。

(a) Upon her black satin lap lay a platinum bag.

(b) A platinum bag lay upon her black satin lap.

(a)は上述の通り Faulkner の文章であり、(b)はそれを通常の文形態に戻したものである。(a)では明らかに、連続する [æ] 音の中間に “lay” 一語だけを挿入することによって、(b)におけるように、異音三語が介在するために [æ] 音が逆に一種 cacophony 的になることが避けられ、スムーズでバランスのとれたリズムを作り出すことに成功している。そうした意味において、Faulkner が MS. 131 で最初 “Upon her lap” を文頭に置いたことには、当然リズムの考慮ということがあったのは間違いないが、しかし “black satin” をマージンに追記したということは、なおそこに、リズムや文姿だけにとどまらない問題があることを示しているように思う。

それは “black” と “platinum” のコントラストということであり、黒の上に置かれた銀色の印象の鮮明さは、もし文の構造を標準的なものにするために逆の順序 (b 例) でそれらの色をあらわすとしたら、その効果が半減されるものであろうと思う。ここでは、対象の物自体よりもその色彩が重要なのであり、だからこそまず大きな黒、ついで小さな銀色と、目に映じてくる順序通りにそれらを記述することで、コントラストのもたらす印象の強さを保存したのだといえよう。

一方、もしプラチナの「物」としてのねうちを考慮にいれるなら、このコン

トラストのあざやかさは、このとき一転してどぎつさに変わってしまうといえはしないだろうか。コントラストがあざやかなだけに一層そういえるだろう。そしてこのどぎつさは、まさしく Temple の頬骨の上の二つの赤い円、唇の毒々しい赤さと釣り合うものであるに違いない。

ところで MS. 131 [1.16] には、上記の “black satin” を含め長短四つのマージン追記がある。しかしそのうちの一つは、TS (および R.) になってから削られている。

MS. 131:

The old man turned slowly, . . . and looked down at 6 people who sat at a long table on which papers and books, *a pistol, a stoneware jug, a corncob that appeared to have been thrust half its length into dark colored paint, lay.*

TS. 344; R. 281:

The old man turned slowly, . . . and looked down at the six people at the counsel table.

MS. のイタリック部分がマージン追記である。ここでは、TS. で落とされたこの追記中の “pistol” という語を考えてみたい。

MS. のこのページについて、Faulkner が「1」「116」「131」の番号で示される三回の推敲をおこなったとすれば、上記の追加は、「116」なり「131」なりの番号を付されたときのものとは考えにくい。というのも、証拠品中に “pistol” が入っているからで、ピストルは Popeye だけが所持していたもののはずだからである。(Popeye を仲間みんなが怖れているのは、まさしくこのピストルのせいである。) Goodwin の住居をさがしてピストルを見つけたとするのは、作品の内容からみてどうも筋が通らないのだが、とすれば証拠品として “pistol”

を持ち出した時というのは、Faulkner の中で Popeye とピストルの関係がまだはっきりしていなかった段階、すなわち Faulkner が *Sanctuary* という作品を書こうと考えたそもそもの初め、[1] の時と考えてよいものだと思う。

このように、ピストルについてはまだイメージが固まっていなかったにしても、一方この追記は、Faulkner が物語中での corncob の位置については、すでに十分な透察を持っていたということもうかがわせる。

となれば、この MS. 131 [1] で一連の事件が結末から始まり、しかもそれから諸々の事件のうちで最も衝撃的な事件の構想がすでに出来あがっていたという事実、更に Chapter One 標示のあるもう一つの原稿、MS. 39 以下で語られるのが、Temple の軽薄な暮らしぶりや Goodwin たち無法者の生活であるという、この二つのことを重ねあわせて考えれば、Faulkner は *Sanctuary* という長篇小説を、いわば短篇小説を書くときのように、発端から終末までの全体についてたしかな俯瞰図を持って書き出したのだと考えて間違いないように思う。

かくして、MS. , TS. 第 XXIV 章と R. 第 28 章は共に、Temple が父親の老判事と四人の若い男 (MS. 131 では五人) に囲まれて立ち去ったあとの法廷内の様子を、手短かに描写して終わりになるが、MS. の結びである “‘Does the State rest?’ the Court said. ‘We rest,’ the D.A. said” (MS. 132) は、TS. で次のように変えられ、Goodwin の女 Ruby の苦しみ耐えしのぶ悲しさ、とでもいうものが伝わってくる叙述になる。R. 283 はこの TS. のそのままの利用である。

The child made a fretful sound, whimpering.

“Hush,” the woman said. “Shhhhhhhh.” (TS. 345)

25. 「第 XXV 章」について

MS. 133, TS. 346 – 348. 裁判に敗れた Horace が再び Kinston の家に戻り、そこから Narcissa 宛に出した手紙の形式になっている。

そのままのかたちでは R. から完全に落とされているが、手紙の中で述べられる二、三の事柄は、拡大された挿話になって R. の p. 285, ll. 1 - 3 ; p. 290, ll. 2 - 10 ; p. 291, l. 27 - p. 292, l. 1 ; p. 292, l. 19 ; p. 293, l. 11 の五箇所で使われている。

原文は次の通りであるが、念のため日本語訳を付することにする。(MS. と TS. の間には一、二些小な語の違いがある。TS. から引用。)

June 23.

“Dear Narcissa —

“I ran. Once I had not the courage to admit it; now I have not the courage to deny it. I found more reality than I could stomach, I suppose. Call it that anyway. I don't seem to care. Only I wish Belle had stayed in Kentucky. At least, that's out of the whole damned state where such things can happen.

“She was at home. When Jones — You remember him: the one who says he used to lead Kinston society; now he drives it — put me down at the corner, I saw her shade up and the rosy light, and I thought of that unfailing aptitude of women for coinciding with the emotional periphery of a man at the exact moment when it reaches top dead center, at the exact moment when the fates have prized his jaws for the regurgitated bit. Thus (Your own words) like a nigger I left her; like a nigger I returned (via the kitchen); entered the house and stood in the door while she laid her magazine down and watched me from her pink nest while I shed the ultimate cockleburr of errant itch and the final mudflake of the high pastures

where the air had been a little too ardent and a little too stark, and so into the old barn and the warm twilight and the old stall fitting again to the honorable trace-galls, and, ay, the old manger lipped satin-smooth by the old un-failing oats.

“Little Belle is not at home. Thank God: at what age does man cease to believe he must support a certain figure before his women-folks? She is at a house-party. Where, Belle did not say, other than it divulging to be in the exact center of bad telephone connections. Thank God she is no flesh and blood of mine. I thank God that no bone and flesh of mine has taken that form which, rife with its inherent folly, knells and bequeaths its own disaster, untouched. Untouched, mind you. That’s what hurts. Not that there is evil in the world; evil belongs in the world: it is the mortar in which the bricks are set. It’s that they can be so impervious to the mire which they reveal and teach us to abhor; can wallow without tarnishment in the very stuff in the comparison with which their bright, tragic, fleeting magic lies. Cling to it. Not through fear; merely through some innate instinct of female economy, as they will employ any wiles whatever to haggle a butcher out of a penny. Thank God I have not and will never have a child — and for that reason I have assailed not only a long distance, but a rural, line at eleven P.M. in order to hear a cool, polite, faintly surprised young voice on an unsatisfactory wire; a voice that, between polite inanities in response to inanities, carried on a verbal skirmishing

with another one — not feminine — without even doing me the compliment of trying to conceal the fact that she had been squired to the telephone; needs must project over the dead wire to me, whose hair she has watched thinning for ten years, that young mammalian rifenness which she discovered herself less long ago than I the fact that, to anyone less than twenty-five years old, I am worse than dead.

“I ran. I dont try to palliate it. But I want to rectify it as far as possible. I know this will be distasteful to you, but it will be the last time, I promise that; next time I may not even have the courage to return. I want you to find that woman yourself; tell her that I must give up the case because I do not think I am good enough, and that I am putting it in the hands of the best criminal lawyer I can find, for an appeal, and that she is not to worry. Do this, my dear. You will have no trouble finding her. She's there now, in front of the jail with that child, standing where he can see them from the window: have I not seen her there a thousand times? God, if he were the only one who had to see her there now.

“Horace.”

(sic) (MS. 133, TS. 346 - 48)

(ナーシサへ —

6月23日

ぼくは逃げて来た。しばらくはそのことを認める勇気が出なかったけれど、いまじゃ逃げたということを否定する勇気がない。世間の実態というやつは、どうもぼくの手には余るものだったようだ。とにかく、逃げたと

言ってくれるがいい。どういわれようと構いはしないさ。ただ、ベルがケンタッキーへ帰っていてくれるといいが、とは思っていた。[二人が顔つきあわせているのでなければ]、少なくともああいうすったもんだも起きずにすむだろうからね。

ところがベルはちゃんと家にいた。町角でジョーンズの車——ほら、おぼえているだろう、むかしはキンストンの社交界を引っ張っていたものだと言いついていてあの男だよ。いまじゃ、社交界どころかタクシーを転がしているというわけだが——そのジョーンズの車から下りると、ちょうど彼女が明りにシェードをつけたところで、バラ色の光が目に映ったもんだ。それで、ぼくはすっかり考えこんでしまったね。男が気持の上でにっちもさっちも行かなくなり、[もう一度出直すほかあるまいと、言ってみれば] 運命の神が、一度呑み下したものを半芻させるために男の顎をこじあげた、まさにその時をみはからって、そうした男の気持の動きにさっと乗じてくる、御婦人どものあの驚きいった能力についてだよ。ともあれ、ぼくは(きみの言い方によれば)黒んぼみたいに妻を置きざりにして家出をしたのだったが、また黒んぼさながら(台所を通過して)舞い戻ることになった。家に入ってドアのところに立つと、ベルは読んでいた雑誌を伏せ、ピンク色の寝床から目をあげてぼくを眺め、ぼくはぼくで[まだちくちくと心を刺すにがい思い出や、泥にも似たきたらしい人間どもの記憶を、通り抜けて帰って来た] 高原のオナモミのいがや、こびりついた泥かすと一緒に最後にもう一度ぱたぱた払い落としていた。[実際、過ぎたあの日々を高原の旅にたとえたとしたら]、あそこで吸った空気は少々熱っぽすぎるものでもあったし、また胸のうちをそそけ立たせるものでもあった。ま、そんなわけで、そのあとぼくは[いまや事が終わり、生活は旧に復したのだということのみずからたしかめる思いで]、なつかしい馬小屋、あのほっかりとあたたかい薄ら明り、馬の引き革ずれがいかにも誇らしげに映える年ふりたうまやへ行って——そうとも、まごうことなき[力の源泉である] 燕麦を食べながら馬が口の端で繻子のようにつるつるにさせた、あのなつ

かしいかいは桶のところへ行ってみたのだった。

リトル・ベルの方はいま家にいない。[現在の自分には、あの娘のことを気遣っている余裕がないので、いてくれなくてむしろ] 助かったと思う。どうも男というのはいくつになっても、身内の女のことより先によその女の力になりたいと考えるものなんでね。リトル・ベルは[田舎に] およばれで行っているのだ。場所がどこなのかベルはいわなかった。ただ、そこが電話のひどく混線する所だということだけは聞いた。ありがたいことに、あの娘にぼくと同じ血は流れていない。ぼくと骨肉をわけ合った者の中には誰も、生得の愚かしさにはちきれそうになりながら身にふりかかったわざわいは鳴り物いりで言いたて、しかも結局のところその身は御安泰、というあんなふうになったものがないことを、ぼくは神に感謝するね。いいかい、わが身だけは御安泰でいようというわけだ。これこそが人を傷つけるものなのだよ。世間には[時として] 邪悪なものがあるというようなことじゃない、邪悪はこの世界の一部になっている。言ってみれば、世界とは煉瓦を中に抱え込んだモルタルみたいなものだ。泥はこの煉瓦には少しもしみ込まないから、煉瓦が身をもって泥の憎むべきことを我々に教えさとしているようなけはいだが、[その実、煉瓦というのは元々どろ土が原料で、だから] 原料と比べて眺めれば、たしかにそいつは輝くばかりの、しかし悲しくも束の間の魔法を使ったのかと思うばかりに、色も変えずにのうのうと納まりかえっていると言える。[そういう、はかない見てくれを大切だと思うなら] その魔法にしっかりとしがみついていることだ。[どうせ、人の道からはずれることを] 怖れて、などという[殊勝な心根がある] わけでなし、ただ売り手から一文でも多く値切り取ってやろうとたくらむのと同じ、[ひとにおくれをとるまいという] 女特有の計算高さがあるだけの話なんだから。[そういう世の中では子供も果してまともな育ちかたをするものかどうか。] さいわい、ぼくには子供がいないし、これからもつくるつもりはない。…… [しかし、そういう思いがあったから一層]、ぼくは涼やかで折目正しい、[まだ世間のよごれに染まっていない] 若々し

い声が聞きたくなり、ちょっと驚くだろうとは思ったが、夜の十一時に何やら辺びなところ [にいるリトル・ベル] へ長距離電話をかけてみたわけだ。ところが折角のその声たるや、こちらからの、ま、たしかにどうということもない問いかけに一応お座なりの返事はするものの、そのやり取りのあいだに別の——女のものではない声といさかいを始める始末。リトル・ベルのそばに誰かがいるのはたしかだが、あの娘にはそのことをぼくに隠そうという気遣いもさらさらありはしない。話し声のよく聞きとれない電話だけれど、その電話を通してリトル・ベルが何をしきりに匂わせたがっているか、ぼくにもよくわかってきた。あの娘はこの十年間、ぼくの頭が薄くなるのをずっと見て来たわけだが、その間に——彼女が自分で気づくよりずっと前にぼくの方では気づいていたのだが——乳房がふくらみ出し、ところがはたち前後のそういう娘たちの目から見れば、ぼくは死んでいるよりつまらないものだという、そのことなんだよ。

ぼくは逃げて来た。いまさら、そのことを弁解しようとは思わない。だが、綻びはできるだけつくろっておきたい。きみがこんなことをしたがるのはよくわかっているが、これが最後だ、きっと約束するよ。この次は、家に戻る勇気さえ持てないだろう。そういうわけだから、なんとかあの女を探してみしてほしいのだ。そして、ぼくは訴訟をおりることにしたと伝えてほしい。どうもぼくはこの件にふさわしいとはいえないし、刑法専門の一番いい弁護士をさがすから、その弁護士にまかせて心配しないでいように言ってもらいたい。どうか頼むよ。あの女をさがし出すのは造作もないことで、赤ん坊を抱いて刑務所の前に立っているのだよ。自分たちの姿が、刑務所の窓越しに夫の目に入るようにというのでね。ぼく自身、そこにそうして立っているあの女を何回も見かけているのだ。やれやれ、それにしても、[思い通りに事がはこんで] 今あそこで彼女と顔をあわせるのはあの男だけ、ということであってほしかったのだが。

ホーレス)

この Horace の手紙は、(手稿本公開以前に) 未改訂版のゲラ刷りで研究した学者たちに極めて不評で、Massey によれば、(次章で述べる Narcissa の返書も含め)「どちらの手紙も劇的な盛りあがりに欠けるもので、最後の山場をつくるところか、むしろ作品の芸術性を台なしにしている」⁽³⁾ のであり、Millgate も Massey の意見を踏襲して、「Massey 氏の指摘する通り、オリジナル版の結末が大失敗なのは、筋の流れを一番盛りあげるべきところで Horace と Narcissa に手紙のやりとりなどさせ、クライマックスとはまるで裏腹の小ぢんまりしたまとめにしているからである」⁽⁴⁾ と述べる。

ついでに (mss. を読んだ) Langford の受けとめ方にも目をやってみれば、「Narcissa 宛の手紙に見るかぎり、Horace の感受性すどく理想家肌のところはまったく影をひそめている。Faulkner はせっかくの物語の終わりを、短慮なかたちで締めくくってしまった」⁽⁵⁾ というようなことが言われている。

以上三人の研究者が述べる通り、手紙のかたちが小説末尾の劇的盛り上げのためには不満足なもの、という見方はおそらく正しいであろう。だが、本論文で私が今までに主張して来たところからすれば、私はここで当然、すでに一度別の場所(「未改訂 *Sanctuary* における Horace Benbow の incestuous な感情をめぐる問題」)で述べたように、⁽⁶⁾ この手紙の持つ意味は決して小さいものではなく、オリジナル版において Horace Benbow という人物を一種悲劇的な行為へと駆りたてる原動力になった彼の基本的な物の見方、あるいはまた、その行為の結果として新たに獲得された人生観・世界観が、どうであれとにかく文章にまとめられて示されていることの意義を強調しなければならないだろう。

実際、上記の論文で述べたことの繰り返しになるが、Horace はいまや女一般の本性をたしかに見抜いたと考える。彼女らの、はかなくも見かけ倒しの無

(3) Massey, "Notes on the Unrevised Galleys of Faulker's *Sanctuary*," p. 201.

(4) Millgate, *The Achievement of William Faulkner*, p. 116.

(5) Langford, *Faulkner's Revision of "Sanctuary"*, pp. 21 - 22.

(6) 「未改訂 *Sanctuary* における Horace Benbow の incestuous な感情をめぐる問題」, 『ウィリアム・フォークナー』, pp. 18 - 19.

垢、あるいは(妹 Nareissa への痛烈な皮肉をこめて語る) 自己保身のためにだけする醇風美俗尊重の素振り、それらは結局男を誘う餌であるにすぎず、その本心は、他をおとしいれても自分だけは無傷でいようという酷薄さなのだ。少しは心の洗われる思いもしようかと Little Belle に電話をかけてみたが、その Little Belle も何のことはない、他の女と同じこと、もっとはっきりいえば「もう一人の Temple」であるにすぎないことを確認しただけ——こうした憂うつな怒りに彩られた Horace の感懐を、我々は手紙の中に読みとることができるだろう。

この手紙が R. から除かれたことの主たる理由は、オリジナル版と改訂版との性格の違い——世間知らずの男が世の実態を目のあたりにし、しかしそのショックを糧にして evil との戦いを試みる、つまり Horace の精神的成長の軌跡を軸とするものであった前者に対し、後者は社会の腐敗ぶり、すなわち世にある邪悪の諸相をあらわにして行くという、その違いから、この手紙が R. では存在理由を失ってしまったためであろう。

だがそれにしても、この手紙のわかりにくさと言ったらどうだろう。何というひとりよがり、何というもってまわった言いまわしの連なりであるか。“that young mammalian rifenss” などということばは、妹あての手紙だから露骨にならぬよう気をくばったあらわれとでもいうつもりなのだろうか。“She is no flesh and blood of mine” の “she” は、常識的には Little Belle をさしているとしかいいえないものだが、手紙の内容自体から押して行くと、この “she” は Temple か、少なくとも Temple と重ねあわせての Little Belle を意味していると考えざるをえない。

私の日本語訳では敢えて [] でくるんだ私なりの解釈をつけ加え、そうすることで Horace のいわんとすることが一応納得できるよう試みたが、そうでもしなければ——つまり、Horace の心情について何らかの予備知識を持ち、それに基づく「解釈」によって文章と文章のあいだの隙間を埋めながら読むのでなければ、この判じ物のような手紙は到底理解不可能だろう。次の第 XXVI 章では、妹 Narcissa がこの Horace の手紙に返事を書いていて、Massey はそ

の Narcissa の返書を “peremptory” な調子のもので批評しているが、⁽⁷⁾ 何を言っているのかほとんど意味不明の手紙を読んだら、Narcissa ならずとも（自分の側のことを話題にする以外書くこともない、ということだってあろうから）押しつけがましい調子になったり、あるいはまったく見当がはずれている返事を書きかねないだろうと思う。

更にはまた、この手紙を虚心に読めば、先ほど記した Horace の社会批判の声とは違う、彼のもう一つ別の声が聞こえてくるような気がする。それはこんなふうには言っているのではないだろうか。「自分はやるだけやった。それでダメだったのだから仕方ないではないか。いずれにせよ、これ以上のつき合いはとても無理なので、あとの始末はほかの人にいいようにつけてもらおう。」

この身勝手な自己満足。しかしこの手紙からは、Horace のそうした心ばえもまた、間違いなく伝わって来ると思う。そして、手紙の示すこの側面に特に注目するならば、批評家研究者によってしばしば述べられる、「Horace は未熟な人間」ということばも決して根のないものではなくなってくる。

だがここでもう一度よく考えれば、身勝手な自己満足を内部に抱え込んでいるのは、小説に登場する架空の人物 Horace ではなくて、実は小説の作者 Faulkner その人なのではないのかという気がしてくる。

Jung の心理学に基づいて *Sanctuary* を考察した David Williams という研究者は、「Horace の精神は、抑圧されたアニマのためにその知的側面を侵され、彼はいまや奇妙な反転現象を通じて女と化している」と述べる。⁽⁸⁾ この精神分析的解釈それ自体に私は何の関心も持たないが、しかし「男が女になる」

(7) Massey, p. 201. なお、Horace の手紙に対する Narcissa の反応については、*Flags in the Dust* (Random House, 1973) 中に見出される次の一文も想起されてよいであろう。Narcissa “had always found Horace’s writing difficult, and parts that she could decipher meant nothing.” (p.351)

(8) David Williams, “The Profaned Temple,” in *Twentieth Century Interpretations of SANCTUARY*, J. Douglas Canfield (ed.) (Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall, Inc., 1982), p. 97.

という異様なことばは、私に (Horace という作中人物ではなくて) Faulkner という作家の人となりを考えさせるいささかのきっかけを与える。つまり、Faulkner にもまたその内部で、男が女と化するようなある奇妙な反転現象を呈している部分があったのではなかろうか — そういう思いが私の中に浮かぶのである。

そしてその考えに従ってみて行けば、問題の手紙についても、Faulkner はこの第 XXV 章を書きながら、それがただひたすらに、世にはびこる悪と戦いそして敗れる男の雄々しくも悲劇的な戦闘終結の書となるとだけ思いこみ、その文面が片側で、書き手 Horace の身勝手さをおのずから露呈するものになるなどは思いもよらなかったのではないかと、ふと考えてしまう。別様にいうならば、実は Faulkner という人は、自分の中のある種の身勝手さにみずから気づく能力を、性格的に欠いていた人物ではなかったのかという思いを、私は禁じえないのだ。

伝記的資料によれば、人間の持つ耐え忍ぶ力を讃え人類の不滅を説いたこの傑出した作家は、しかし一方で、例えば新しく情人ができるたびに、彼女らをわざわざ妻子の前に連れて来てみたり、酔いにまかせて自分の情事をあけすけに妻に語ってきかせたりするといった、⁽⁹⁾ 自分の感情にすっかり溺れ込んでしまうようなことも時としてあったようである。

最近新たに公開された諸種の資料から判ずると、Faulkner のこうした傾向は、生涯変わらずに彼の内部に潜在していたように思われる。しかし彼が、妹にあてた手紙の中で人間の心の醜さに対するやり場のない怒りをあらわす Horace そのままに、精神の腐敗と欺瞞を最も憎むところの高潔の人であったというのもまた紛れもない事実である。しかも彼のこの高潔さは年齢を加える

(9) Meta Carpenter Wild and Orin Borsten, *A Loving Gentleman*, p. 172; Ben Wasson, *Count No 'Count: Flashbacks to Faulkner* (Jackson: University Press of Mississippi, 1983), pp. 145 - 46; *Faulkner: A Comprehensive Guide to the Brodsky Collection, Vol. II: The Letters*, Louis Daniel Brodsky and Robert W. Hamblin (eds.) (Jackson: University Press of Mississippi, 1984), p. 206.

と共にますます幅広く大きくなって行き、身勝手とか自己惑溺とかのマイナス面をすっかり内に取り込み包み込んで行った——Faulkner とはまさしくそういう人であったろうと思う。彼の三十才台から晩年に至るまでの各作品が、一つ一つ段階的に、Faulkner の精神の成長の軌跡を示して行っていると言えるだろう。Noel Polk は、André Bleikasten が *The Sound and the Fury* を、Faulkner の “narcissistic self-involvement” の超克のあらわれとみていることを伝えているが、⁽¹⁰⁾ “*The Sound and the Fury*” という部分を「Faulkner の中期以降のすべての作品」と書きかえて、私は Bleikasten のこの見解を私の推論の一つの支えに援用したいと思う。

26. 「第XXVI章」について

MS. 134 および TS. 349。先に述べた通り、前章の Horace の手紙に対する Narcissa の返書という体裁をとった極めて短い一章である。TS. にもとづいて全文を示せば次の通りであるが（前章に引きつづき日本語訳を付記）、MS. では日付が “June 28” になっている。

“June 29.

“Dear Horace —

“I received your letter. Your message to that woman I cut off and mailed to her at tha jail. I imagine she got it. They took the man away the day after you left. They were getting ready to lynch him, I some said. So Jefferson is spared that at least. Why they should want to I cant see, since they are going to hang him anyway. So you can save hiring another lawyer.

(10) “Afterword,” in *William Faulkner, Sanctuary: The Original Text*, Noel Polk (ed.) (New York: Random House, 1981), p. 300.

"Bory has been quite sick. Sundy will let him eat green fruit. A nigger is the ruin of any white child. I dont know what to do. I cant say anything, because Miss Jenny is so foolish about darkies. She is as usual. She sends love.

"I am glad to hear you have decided to stay at home after this. I think that is wise. Belle is only thirty-eight. She might not be there when you come back, next time.

"Love,

"Narcissa."

(拝復)

お便り、いただきました。[お手紙の中にあった]あの女宛のお兄さまの伝言は、そのところだけ切りとって刑務所気付で送っておきました。届いたろうと思います。お兄さまがおたちになった次の日に、町の人たちがあの男をつれ出しました。アイソムの話では、みんなでリンチの用意をしていたそうです。ともあれ、ジェファソンの町は手間がはぶけたということでしょう。それにしても、どうせは縛り首になるものならどうしてリンチするのか、わたしにはわかりません。でも、これであなたも、別の弁護士を雇わずにすむというものです。

ボリーはひどい病気をしていました。サンディが熟していない果物を食べさせたもんですから。黒んぼにかかったら白人の子供はまったく身がもてません。どうしていいものやら。わたしは何もいえないのです。だって、ジェニーおばさんが黒んぼたちにびしっとした態度をおみせにならないんですもの。おばさんはお変わりありません。よろしくとのことです。

これからはそちらに落ちつかれるとのお話、うれしく読みました。そうでなくては、と思います。ベルはようやく三十一になったばかりなんですよ。こんど家を出たら、戻ってもベルはもう待ってなんかいないでしょうね。

かしこ。 ナーシサ)

前章で述べた通り、Horaceの手紙にはNarcissaでなくともまともに対応することは困難だろうが、しかしいうまでもなく、Horaceの手紙を書いたのも、またNarcissaの返事を書いたのも等しく作者Faulknerである。とすれば作者は、Narcissaが兄の手紙のわけのわからなさに辟易して上記のような返事を書いたということを言いたかったはずはなく、Faulknerがこの章で、素っ気なくもまた見当はずれのNarcissaの手紙を掲げた理由は、(どうであれHoraceの手紙にみえる理想主義的純粋さとは対照的な) この女の冷酷無残な利己性、さもしい優越意識を読者に伝えようと意図してのことであったと考えなければならない。

更にまたいえば、Faulknerはこの短い文章の中で、Goodwinがリンチで殺されてHoraceの努力が決定的に失敗したことを示すが、その最終的敗北を知らせHoraceに最後のとどめを刺すのが、まさに妹のNarcissaであるというかたちにすることで、とにもかくにも過去四十三年間この女を心の支えと眺めつづけて来たHoraceの、その胸のうちにこみ上げて来ているに違いないむなしい思いをも、またたしかに読む者に伝えているように思う。